

仏法を主とし、世間を客人とせよ

心の主体

御一代聞書一五七章に云く、

「一。仏法を主とし、世間を客人とせよといへり。仏法の上よりは世間の事は時に随ひ相働くべき事なりと云々。」

世間とは我等の依つて生きる依報、宿業所感のこの人生である。この世間に於いて生きさせて頂くに当つて、「仏法を主とし、世間を客人とせよ」と仰せられるのである。それについて法然聖人は和語燈の中に、

「常に煩惱は発るなり。発れども煩惱をば客人とし、念仏をば心の主としつれば、あながちに往生をばさえぬなり。煩惱を心の主として念仏を心の客人とすることは、雑毒虚仮の善にて往生にはきはるるなり。」と仰せられた。

この二つのみ教について考えるに、この二つのみ教は異なるが如くして実は同一なる趣がうかがわれることである。即ち法然上人の仰せは、信の主観的な表現であり、蓮如上人のみ教は信の客観的なありかたである。仏法とは具体的には念仏であるから、仏法を主とするとは、念仏を主とすることである。しかししてもし親鸞聖人の信心為本の宗風よりすれば、信心を主とし煩惱を客人とするということになるであろう。

念仏を主とし世間を客人としようとすれば、その前に念仏を主とし、煩惱を客人とするところの信が成立していなければならぬ。もし仏法を聞いても、念仏が心の主体とならず、煩惱が心の主体となつて、念仏を心の客体としていたのでは、真実願往生の白道は開けないであろう。

仏心即ち心の主

心の主体は一体何であるのか、これは実に大きな問題である。釈尊の出家も、親鸞の入山も皆この問題の為であったということが出来るであろう。煩惱を心の主とするか、念仏を心の主とするか。煩惱を主とするが故に無明の迷路に輪廻し、念仏を主とするが故に浄土に往生するのである。

煩惱を主とする者は、実には、我執自力を主体とするものである。この自力我執が主の座につけば、限りなく、貪欲瞋恚愚痴の三毒の煩惱や、あるいは名利心、あるいは傲慢、あるいは邪見、あるいは懈怠等々の無明煩惱が心身の指揮者となつて、常に迷路にあらしむるのである。

しかるに念仏を心の主とするとは、心の奥の院に自力の魔王が主の座を占めていたものが、一心帰命のたちどころに、この自力が滅ぼされて、南無阿弥陀仏が主の座に現われて下さったことである。念仏が心の主とは、南無阿弥陀仏が心の主となつて下さったことである。南無阿弥陀仏が信心となつて、心の主となつて下さるのである。この南無帰命の信心は、もとより、仏心そのものである。御文章に、

「まことに宿善の開発に催されて仏智より他力の信心を与えたもうが故に、仏心と凡心と一つになるところをさして信心獲得の行者とはいうなり。」（二帖目九通）と説かれてあり、又

「信心といえる二字をばまことのところと訓めるなり。まことのところというは行者のわろき自力のころころにては助からず、如来の他力のよきころころにてたすかるが故に、まことのころころとは申すなり。」（一帖目十五通）

と仰せられた。これらの説によつて明かなるが如く、信心は仏心である。それ故に又まことの心である。更に和讃には、

「智慧の念仏うることは、法蔵願力のなせるなり、信心の智慧なかりせば、いかでか涅槃をさとらまし」

と御示しになつた。

信心は仏心であり、まことであり、やがて智慧である。凡夫の心中において発起すといえども、全く仏心である。信心が心の主となるとは全く親様が心の主となつて下さることである。

『唯信抄文意』には、

「無明の闇をはらひ悪業にさへられず、この故に無碍光と申すなり。無碍は有情の悪業煩惱にさへられずとなり。然れば阿弥陀仏は光明なり。光明は智慧の形なりと知るべし。」

とある。阿弥陀仏とは光明である。然るに光明とは智慧である。智慧の光明である。この智意光は衆生の悪業煩惱が如何ほど深重であろうと、それにさえられず救ひたもう故に無碍光と言われるのである。信心とはまことにこの智慧の光明、無碍の光明にぶち当つて、あるがままの悪業煩惱のなりでこの光明に抱き取られる、その体験直感を信心というのである。であるから信が主体となるということは、そのまゝ南無阿弥陀仏の親様が主体となつて下さることである。

「無碍光の利益より、威徳広大の信を得て、

かならず煩惱の水とけ、すなはち菩提の水となる。」

この和讃の意は、信を得ることは無碍光の利益、無碍光より頂く利益、一切の利益は無碍光の利益である。しかしてこの無碍光そのものが、実に威徳広大なるが故に、信もまた虚空の如く威徳広大なのである。この無碍光なる智慧光によつて照破されるが故に、「かならず煩惱の水とけ、すなはち、菩提の水となる」のである。自然なる如来の無碍光の前で、何で凡夫の無明があろう。悪業の水は転じて功德の水となりて、本願大悲智慧真実功德大宝海水たる名号一乗の大海に入るのである。

実に信とは是の如き全我的な大革命が現われて来ることである。久遠劫来の自力の悪魔は主から追放された。如来久遠の本願力はこの自力の魔王を破碎しつつ、彼自身の本願名号の大悲真実と智慧真実を肯定し、来つて金剛の大信心となりたもうたのである。ここに人格の金剛の主体性は確立されたのである。念仏は心の主となつたのである。

心の主客

念仏を心の主とし煩惱を客人とせよとは、つまり大信決定することであつた。念仏のない生活は常に煩惱が心の主体となる。我が一切の推進力となつて、貪欲にあらざれば瞋恚、瞋恚にあらざれば愚痴、愚痴にあらざれば貪欲と、常に三毒煩惱が全私の指揮者となつて、外へ外へと流転してゆくのである。煩惱には自らを内に転ずる力はない。

もしこうして内に自力我執を主としているならば、自らを悪と見、愚と見きわめることは出来ない。その当然の結果として、苦に陥つた時、後悔することはあつても、懺悔するものではない。自らいよいよ愚悪にして、いよいよ外に、人の上に悪を見て裁くのである。決して自己の現に在る理由を自己の上に見ることは出来ない。自らの苦の因、闇の因を外に求めて、如何に呪い自暴自棄するも、誰もこれに応ずるものはない。いよいよ闇の中に沈むのである。

然るに一度大信決定して智慧光、内に照せば、信心は主の座にあり、煩惱は内觀の境にあらわれて、その客体となるのである。その時、法徳よりいわば、いわゆる信の一念に三世の業障一時に消滅するいわれがあるけれども、機につけば煩惱は依然としてあり、否、念仏の身となりてかえつて煩惱の深くして底なきを自証するのである。

仏智無底、煩惱無底を体感するものこそ、信心の智慧である。煩惱によりては見えない、信心の智慧によりてこそ、そのあるがままの相を現わすのである。全我煩惱具足と信知するが故に、自力無効と知つて本願力に乗るのである。その時、念仏は心の主となり、煩惱は客人となりおわるのである。もし念仏するも念仏が心の一隅を占むる客人であるならば、その念仏は雑毒虚仮の自力の業となると言われるのである。3

全我を以て

「仏法を主とし世間を客人とせよ。」との蓮如上人の仰せは、誠に頂くべきである。たとえ、仏法を求めるが如くであつても、世間の生活を主体として名利のとりことなり、仏法を主体としないならば、逆に信生活を成就することは出来ないであらう。「梅と桜と両手に持つな、一度世間を捨てて仏法一つになりきれ。捨てたこの世に味が出る。」との先哲の言は、まことに至言といふべきである。「たとひ大千世界にみたらん火をもすぎゆきて仏のみ名を聞け。」との教誡もまたその意は一つである。

けだし、宗教の問題は出世の大事、一大事因縁の成就満足にある。世尊が本願の名号を説くことを以て、出世の大事とせられるならば、我等は本願の名号を聞くことを以て、出世の大事因縁としなくてはならない。真実の教、大無量寿経はまことに説聴一如の経である。説く者と聞く者とは同一価値の世界におかれる。聴く者が説くことは出来ない。然し真に聴聞するには、説く者と同一世界が開いて来なければ聞くことは出来ない。

久遠の真実は、全我を以てこれを聞信しなければならぬ。合掌して説かれたものは、合掌して聞かなければ我がものとはならない。全我を打込んで説かれるものは、全我全生活を以て聞かなければ得ることは出来ない。全我を打込んで聞け、一切を捨てて聞け。そこにのみ開けて来るのが念仏道である。

然し我等は生きるためには食わなくてはならない。衣食住のために追い使われている。そうだ、それが我々の現実である。もしその為に聞くべき時が与えられないという人があるならば、それはまことに痛ましいことである。聞きたい心がありつつ聞くべき時が絶対に恵まれないとすれば、悲痛これより大なるはなしであろう。しかし大部分の人が果してそうであろうか。多くは求める心がない。他の享樂等に使う時はあつても、正法に耳をかす意がないのであり、更に聞く機会があつても本気で聞くことが出来ないであろう。

もし千日に一日聞く日があれば、聞かれる日に真に聞くべきである。九百九十九日はこの一日のためにあるのである。食わなくては生きられない。しかし食う為に生きていくのではない。正法を聞き、念仏道の為の一生である。正法を聞く日のために平生を働き、働く日に念仏一道にある人は、世間に生きつつ仏法を主とする人である。正法を聞き正法を生きる為の人生であるのか、衣食等で享樂する為の人生であるのか、道は二つしかない。

しかし、念仏道を生きる人も人生を楽しむ。真に人生を楽しむといつていいかも知れない。末通つた喜びである。道そのものが不滅なる道の楽しみである。法樂樂といわれ、法味樂といわれるゆえんである。

自然の法則

「一念信心をうる人のありさまの自然なることをあらはすを法則とは申すなり。」

(一念多念証文) 4

信心とは迷妄なる行者のはからいではなくて、自然なる法則に随順したのである。浄土の規定、名号の全規定の中に生きるものである。であるが故に、

「法則というは始めて行者のはからひに非ず、もとより不可思議の利益にあづかること、自然のありさまと申すことを知らしむるを、法則とはいふなり。」(同上)といわれるのである。

その通り、玄人というのは法則を知つた人のことである。時計一個でも素人がこれをつつけば壊してしまうであろう。法を主として、事実をそれによつて規定しなければならぬ。生活の全ては如来本願の自然なる法則のまま生かさねばならない。法を求めず、法を聞かず、法を信ぜずして、家にあつては子を養育し、世間に出でては社会国家のために尽くさんとする如きは、素人にして家を建てんとし、医学を知らずして病人を治癒せんとするが如くである。社会国家に害毒を流し、ひいては逆に身の不幸、破滅となる。

則によつて我身を規して徳を得、自然の則に一生を托して、世の範となる。かくの如き、正しくも聖なる法を説く典に遇い得たるを唯一の喜びとしたまうのが我が聖人である。

「誠なる哉や、撰取不捨の真言、超世希有之正法、聞思して遅慮すること莫れ、ここに愚禿積の親鸞、慶ばしき哉や、西蕃月支の聖典、東夏日域の師釈に遇い難くして今遇うことを得たり。」

仏法を主とせよ。法を上におけ。不滅の聖者も唯これ法が生んだのである。法を無親して我が迷妄をおし通せば、自損々他の闇路のみ待つであろう。

その籠を水につけよ

「一、人の心得のとほり申されけるに、我が心はたゞ籠に水を入れ候ふ様に、仏法の御座敷にては有りがたくも尊くも存じ候ふが、やがてもとの心中になされ候と申され候ふ所に、前々住上人仰せられ候。その籠を水につけよ、我が身をば法にひてて置くべきよし仰せられ候ふ由に候、万事信なきによりて悪きなり。善知識のわろきと仰せらるるは信の無きことをくせごとと仰せられ候ふ事に候。」(御一代聞書)

この蓮師の仰せと、ある同行の言との差違は、主体と客体との差である。籠に水を入れる人と、籠を水につけてしまふ人である。心の籠に水を入れる人は、私が法を聞いている人であり、仏法の水にこの破れ籠の全てをひてた人は、修心仏法と、仏法に心を撰取された人である。我が仏法をつかむか、仏法が我を救うかの天地の相違である。一つは自力の信であり、一つは他力の信である。

「その籠を水につけよ。我が身をば法にひて置くべきよし。」仰せられて、その次に「万事信なきによりて悪きなり。」とあるよりすれば、我が身を仏法にひておくことは、信心決定のことであることは明かである。二種深信の法の深信には、「彼の願力の道に乗ずれば、定んで往生することを得」とあり、二河譬には、「彼の願力之道に乗ず」とあり、一度本願の道に乗れば、汽車に乗った如く、川の流れに籠を入れた如く、南無阿弥陀仏の法と行者とは一体であつて離れることは出来ない。

高原の陸地に邪見憍慢の破れ籠を持ち上つて、説教の水をくみ込むことをやめて、四大五陰仮和合のこの宿業の身をば、恭敬の谷底に、流るる大悲の川水にひててしまふべきである。法は常恒不変の河である。我は無常転変にして相對有限なる破れ籠である。しかも仏智満入と全我をひたしたもう智慧大悲本願の水は、金剛の信心となりたものである。水の低きについて流れるが如く、大悲本願の水もまた、無有出離之縁と投げ出した合掌の大地に流れたものである。

人格の主体性

現代の多くの人の生き方は、自我を通し貫くことを以て人格の主体性の確立だと考える。しかし自我を主張し、自我を実現してゆくことが果して人格の主体性の確立であらうか。

又仏教、特に他力真宗を誤解する人は、他力本願の言を嘲笑し、これを自力更生の言と對待して、他力本願とは弱者がいたずらに他の助けに依頼して為すことなき横着者の別名の如く考えている。

しかるに、親鸞聖人は他力真宗とは金剛の真心を獲得することとせられた。即ち如来本願の真実が、衆生心中の自力我執を滅して、威徳広大の大信心を廻向顕現したもう、そのまゝが金剛の真心の獲得である。自我の実現ではなくて、如来の顕現廻向であり、自我の主張ではなくて、無我の信順である。他人を見下げて裁く独善ではなくて、罪惡の現実への自覚である。しかもかかる他力本願の世界に安住する念仏の人の

上に、真の人格の主体性の確立を見、自我実現の我の人の上に、不断の人格の動揺を見るのである。

私は今は、仏法を主とし世間を客人とする人、即ち信心を主とし煩惱を客人とする人こそ、不動の人格の主体性を獲得した人であると言えは足るのである。人間悪を超越する法への信順、金剛不壊の信、自力を捨て他力への廻心、大懺悔による信の獲得なしには、自損損他の破滅のみあつて、主体性そのものを失つてしまうこと、大東亜の盟主とか、自力更生とか言っている間に国を滅ぼしたと同一である。かくて自力我執を貫くを以て人格の開放と考え、主体性の確立と考える人の危きこと朝露の如し。そこにはただ地獄道のみがあるであろう。

自然の大道

念仏なき人は、ただ自己の理性判断によつて、人生という大海の航海を続けようとする。然し、そこには人間理性の限界を知らず、理性そのものの持つ迷妄を覺らず、やがては愚痴の大波浪に吞まれるであろう。道徳的修養によつて、一二の煩惱を自殺させた位では到底、五濁悪世を真に渡ることは出来ないであろう。

「自然というはしからしむという。しからしむというは、行者のはじめてともかくも計らはざるに過去今生未来の一切の罪を善に転じかへなすというなり。転ずというは罪を消し失はずして善になすなり。よろづの水大海に入れば即ち潮となるが如し。弥陀の願力を信ずるが故に、如来の功德を得しむるが故に、しからしむという。」(唯信抄文意)

信の宗教は一切がありのままに如来によつて生かされる自然転成の世界である。部分我の自殺ではなくて全我の弁証法的否定による価値の転成である。

もし世間を主とし己を客とすれば、変転極り無い世間に追従しつつ、おし流されてゆくより外なく、もし我を主とし世間を客としてゆけば、身の破滅となるであろう。然るに仏法を主とし世間を客とし、念仏を主とし煩惱を客とする信の世界では、一切はありのまま生かされるのである。

世間は永遠の生死の苦海である。その一波浪といえども、これをどうすることも出来ない。いわんや八万四千の無明煩惱の大波小波は、本願弘誓の大船なくしてこれを渡ることは出来ない。波高く海に底なきが故に、本願の大船に絶対の力あり、無明の闇深きが故に、如来の智慧光にはかりなく、罪悪煩惱に限りなきが故に、如来の功德に限りがない。かくして如来と衆生とは対立しつつ、しかも信の境において、仏凡一体、機法一体と渾然一体、炭と火、氷と水の如くに転悪成徳の大調和の世界を出現したもうのである。

結言

「仏法を主とし、世間を客人とせよ。」

まことに頂戴すべきである。もし人、このみ言の如く聞信念仏すれば、しかしてこの人生最初のみ言を人生最後の言たらしむることが出来るならば、この人は、不退転

の行者として、感謝の一生を終るであろう。その行歩は歴史的意義に於いて讃えられるであろう。汝果して仰せの如く、生きつつあるであろうか。

念仏して沈痛なる内観反省に入り、純粹無雜の信に徹して、ただ是れ正法を敬うて念仏一道に生くべきである。